

Chapter 5

考察とまとめ

5.1 対立の社会的背景

ニュースグループ `fj.news.usage` に投稿された実際のメッセージを解析した結果、議論の過程で、異なる範疇に属する用語を多く含むメッセージが交互に投稿されるという現象が頻繁に観測された。この現象は、文化・価値観を異にする参加者間で、互いに相手の考え方へ歩み寄ることなく、自らの文化・価値観に固執した主張が繰り返されているときみられる。

`fj.news.usage` で大きな議論を読んだ話題として、誤りの指摘の仕方に関する議論、用語の誤用に関する議論、ニュースリーダのバグ攻撃の是非を巡る議論の三つのスレッドについて、統計的手法を用いて対立点の抽出を試みた。抽出された対立は、

- 誤りの指摘の仕方に関しては、
 - 情報の正確性を重視する立場と、
 - 初心者への配慮等、暖かみのある人間関係を重視する立場との対立、
- 用語の誤用に関しては、
 - 誰にでも誤解の生じない、正しい言葉使いを重視する立場と、
 - その場での通用性を重視し、過度の指摘は有害とする立場との対立、
- ニュースリーダのバグ攻撃に関しては、

- 規格に即したメッセージであれば非難されるいわれはないとする立場と、
- バグのあるニュースリーダにも配慮したメッセージを発信すべきとする立場の間の対立、

であった。これらの対立は、どこの誰にでも通じる普遍性の高いコミュニケーションを指向する立場と、コミュニケーションの場において、相互の立場に配慮した暖かみのある人間関係を求める、コミュニティを指向する立場の間の対立に集約することができる。

普遍性の追求は、学術的議論において要請され、また、コミュニケーションの場のルールに関してコンセンサスを得る場合には考慮されるべきである。今回解析した *fj.news.usage* では、普遍性を追求する価値観が優勢であった。これは、このニュースグループがネットニュースの使い方を議論する場であり、ルールを他者に強制する内容を含んでいたためと思われる。

一方、参加者が暖かい人間関係を求めることが自然な要求であり、更に、コミュニティをつくり出して、参加者のアイデンティティ確立を手助けするという意味もある。

普遍性を追求する場は、抽象的コミュニケーションを要求し、コミュニティとは相反する場とも考えられる。しかしながら、現実の *fj.news.usage* には、「常連」と呼ばれる、一定のパーソナリティを認められた人々があり、彼らが交わすメッセージには発信者の個性も認められる。これは、記事を多数投稿している特定の人々が匿名投稿者の攻撃対象となっていることからも裏付けられる。このような人々はある種のコミュニティを形成していると考えられる。普遍性を追求する場の抽象的コミュニケーションであっても、特定分野に関する能力を認め合うことで、コミュニティを形成し得るものと考えられる。このコミュニティに参加する条件は、各々の分野における専門能力と、抽象的コミュニケーション技術である。

ネットニュースなどの電子的コミュニケーションの場は、個人が誰にも束縛されず、公衆に対してメッセージを発信する場である。これは、出版、放送などの伝統的な一对多のコミュニケーションと異なり、出版社や放送局が果たしていたゲートキーパー機能が存在せず、個々のメッセージの発信が妥当であるか否かは個々の発信者が判断しなくてはならない。このためには、各々の参加者が、コミュニケーションの場の特性（文化）を良く理解した上で発信することが要求される。

5.2 電子的コミュニケーション上のコミュニティ

今回の解析は、ネットニュースの使い方に関して議論する場について行い、普遍性を追求する傾向が強いとの結果を得た。しかし、この場においても、他者に配慮した暖かみのあるコミュニケーションを求める主張は繰り返しなされている。また、趣味に関する議論の場では、より感性的なメッセージが多く交わされており、居心地の良い仲間社会を追求する傾向はより高いものと思われる。

普遍性の追求と暖かみのある人間関係の追求は、共に解決できる解が存在しない場合が多く、同じコミュニケーションの場で、両者が同時に主張されると、議論は疊み合わず、不毛な対立を招く可能性が高い。しかしながら、電子的コミュニケーション手段は、議論の場を細分化することが容易であり、適切な場の設定がなされれば、感性的議論に集中したコミュニケーションの場もつくり出すことができよう。どのような場でも、文化的多様性による対立は存在すると思われる。しかし、少なくとも、抽象的コミュニケーションに不慣れな者にも参加の機会を与えることができるはずだ。

個人がしっかりとアイデンティティを確立することは、民主主義の前提でもある。アイデンティティの確立には、コミュニティに参加して、社会の中で独自の役割を果たすことが有効であると考えられている。電子的コミュニケーション手段は、コミュニティの要件を次のように満足すると考えられる。電子的コミュニケーション技術が、一方で、熟慮の時間を奪い民主主義を破壊する傾向を持つとしても、個人の自立した人格形成を助け、健全な民主主義の発展を助ける作用も併せ持つものと思われる。

- **近接性:** 交わされる情報量の多さと、暖かみのある内容が必要。コミュニケーションの場が充分に細分化されれば、参加者の関心事に充分な情報が提供され、また、参加者の発信の機会も充分に与えられよう。
- **依存関係:** コミュニティへの参加が、参加者にとって意味のあるものであるという意識。自らの必要に応じて参加する場を選ぶことで実現されよう。
- **役割意識:** 参加者がコミュニティの中で一定の役割を果たしているという意識。コミュニケーションの場においては、主に、情報を発信することが参加者の役割となる。更に、コミュニケーションの過

程で自らの得意分野を自覚し、これをコミュニティに役立てるなら、役割意識はより強固となろう。

5.3 コミュニティと普遍性を巡る対立

コミュニティは近接性を要件とし、開かれた社会とは相容れない。インターネットは公開され誰でも異議を申し立てられる統一規格 (RFC) に従えば、誰でも接続できる、極端に開かれた組織である。このような場において、コミュニティが成立し得るのは、「自律分散」というインターネットの理念、すなわち、その社会の階層性によると考えられる。インターネットに参加する組織間での情報流通 (接続) に関しては、統一された規約の遵守が要求され、極めて抽象的・匿名的な関係で結ばれるが、接続組織の内部の運営、接続機器の選定は、個々の接続組織の自由に委ねられ、更にこの上を流れる情報に関しては、全面的に参加者の自由に委ねられている。

この重層性のために、インターネットは、全体として普遍的な場でありながら、個々のコミュニケーションの場は、あるものは普遍性を追求し、あるものは暖かみのある人間関係を追求することができる。もちろん、個々のコミュニケーションの場も、全体を律するルールと無縁ではあり得ず、そのルールの範囲内での運用が要求される。fj.news.usageにおける議論でも、RFCに違反メッセージに対する批判がなされる場合があった。しかし、RFCには従うべきであるとする考えが支配的であり、大きな議論には至っていない。

社会全体は抽象的かつ普遍的な規約に従い、個々の部分社会には多様性を認めるというインターネットのあり方は、民主主義、市場経済、学術社会などの今日成功している社会形態に共通する。すなわち、民主主義は議決手続きを厳格に定める一方で思想・信条・結社・言論の自由を認め、さまざまな政治団体の選挙、議会での競合により成り立ち、市場経済は開かれた公正な市場取り引きと自由な企業活動で成り立っている。成功をおさめた社会システムにこのような社会形態が共通してみられるることは、社会が拡大してもなお、普遍的ルールは必要であり、多様性の維持が社会の発展に欠かせなかつたためと思われる。

近年、絶対的、普遍的な規範に対する信頼が薄れるに伴い、人間社会は統一された一つの原理によって支配されるべきであるとの考え方方が力を失い、それぞれの場に様々な規範が存在するべきとの考え方方が広がっている。マフェゾリは、現代社会の様々な部分で人々が部族的小集団への帰属

を深め、個人主義が衰退する傾向にあると指摘している [Maffesoli 1988, Lyotard 1986].

しかしながら、部族社会への回帰は、今日我々が抱える社会問題の解決にはならない。部族社会は、その内部には暖かな人間関係が形成されるが、異質な他者に対しては極めて冷酷になる。今日世界各地で起こっている深刻な紛争の多くに、部族社会が暗い影を落している。更に、現在の世界で、社会が異質な他者との交流なしに存続することは困難であり、それぞれの社会に抽象的な人間関係を形成する技術が要請されるとともに、それら個々の社会を包含した社会は抽象社会とならざるを得ない。地球環境問題や、人口・食糧問題など、今日の人類が抱える様々な問題も、全人類規模での合意の形成なくしては解決不可能であり、抽象社会における合意の形成、円滑な運用技術の必要性がこれからますます高まるものと思われる。

一方で、暖かい人間関係に支えられたコミュニティの再生も求められ、行政、企業の側でも、人々に自発性を發揮させ、生きがいを与える、小集団形成の試みがなされている。抽象性の高い普遍的な全体の結び付きと、多様な部分社会が並存する自律分散型の社会は、コミュニティと普遍性の双方の要求を満足する解となる可能性が高い。

電子的コミュニケーション技術は、有機的な暖かみ溢れる人間関係をつくり出すとともに、社会の抽象化を促進すると考えられ、公正で開放的な社会の発展と普遍化に大きく貢献すると期待される。しかしながら、電子的コミュニケーションの持つ大きな自由度と多彩な機能、そしてこれが生み出す両義的特質は、電子的コミュニケーション上のコミュニケーションの場の性格を極めて曖昧にする。電子的コミュニケーションの登場という新しい環境に社会が適応し、この機会を生かすためには、社会、利用者の双方が、電子的コミュニケーション社会に対する理解を深め、個々の場の特性に即して利用する必要があるだろう。

5.4 違法行為への対応

電子的コミュニケーションは新しい技術であり、法律や取締り体制など、社会の側の対応も整っていない。更に、誰でも公衆に対して情報を発信できるという、ゲートキーパー機能の崩壊は、ともすれば、社会規範逸脱の横行を招く。しかしながら、電子的コミュニケーション上に形成された社会も、伝統的な社会の一部であり、現行法は等しく適用される。

電子的コミュニケーションの場を支配する文化が、社会規範からの逸

脱を容認する傾向が高い場合、これが参加者に影響を与え、参加者を違法行為に駆り立てる危険がある。このメカニズムは、コンピュータ犯罪の背景の中で、以下のように説明されている。

特異交友理論は、犯罪学的調査にもとづいたもう一つの特徴を説明してくれる。この理論は、犯罪者の行為はたいてい彼らの同僚に容認されている慣行からほんの少しずれるのみであると説く。人間はいっしょに働いていると往々にして、わずかに非倫理的な行為も互いの影響でつのってきて、やがて重大な行為になるという。従業員が今日は鉛筆を、明日は便せんを、次の日はポケット電卓を家に持ち帰るというのもこれである。電話線を使ってライバル会社のコンピュータ記憶装置からプログラムを盗んだフレッド・ダーム事件の場合、競争会社のプログラマー同士が、不正な方法で遠隔端末機を使って互いのコンピュータから盗み出すのは日常行われているという、民事事件での証言があった。その証言によれば、各プログラマーがそういう行為をお互いに正当化し合って結局日常茶飯事化してしまった。ダームは逮捕されたときひどく憤慨したという。[Parker 1976]

fj.news.usage で行われた議論を読む限り、ネットニュースの参加者の大多数は、法の遵守に価値を認めており、違法行為は厳しく批判される傾向にある。

参加者と、参加者の所属組織の関係も興味深い。ネットニュース (fj) には、個人の資格で参加することが求められている、個人は所属組織の計算機資源を用いて参加しており、所属組織との関係が議論の対象となる場合がある。これは、ネットニュースのヘッダ部に、投稿者が投稿に利用した計算機の所属組織が記載されており、また、発信者のアドレスやメッセージ ID からも所属組織を知ることができる。

所属組織は大学、企業の場合もあれば、インターネットプロバイダの場合もある。表示された参加者の所属組織が有名大学などの場合は、他者に劣等感を与え、感情的反発を招く場合がある。また、投稿されたメッセージに反感を持つものが投稿者の所属組織の責任を問い合わせ、著しい場合には、その所属企業の製品に対する不買運動を呼びかけた例もある。

感情的反発に基づく所属組織への攻撃は、ネットニュースの議論において、一般的には、批判的な反応を受ける。しかしながら、違法目的での利用など、著しく問題と思われる投稿に対しては、所属組織の管理責

任を問うことも正当と考えられており、これを受け止めた組織の他のメンバーから、組織内部での対処を報告する記事が投稿された例もある。

インターネットの利用者は、大部分が、何らかの組織を経由してインターネットに接続している。この接続組織は、企業であれ、大学であれ、インターネットプロバイダであれ、伝統的な社会の中で活動する法人であり、その組織活動の一環として個人にユーザ・アカウントを発行し、組織が保有する計算機資源へのアクセスを許している。

このような組織は、新たなゲートキーパーとなり得る。そのゲートキーパー機能は、伝統的に出版社などが果たしていた機能と異なり、メッセージの内容にはほとんど干渉しない。また、干渉がなされたことが明らかになると、コミュニケーションの場で批判を受けることになる。しかしながら、違法な投稿など、メッセージ発信者の目に余る行為に対しては、アカウント剥奪などの管理行為がなされ、これが不十分であれば、法的責任を問われる。

5.5 社会関係の変化

この論文では、電子的コミュニケーションの作る抽象的人間関係の議論に際し、都市的人間関係を良く似た例として参照してきたが、都市の誕生と発展の経過もまた、電子コミュニケーションが作る社会の将来を考察する参考になるであろう。

都市は集落が発展した結果として誕生したものではなく、村落的共同体相互の誓盟による結束により誕生した。初期の都市は中軸市民の「内部道徳」によって運営されている。これは、電子的コミュニケーションが、いくつかのサイトの相互接続によって誕生し、当初は計算機の専門家の良識に依存して運営されていたことと対応しよう。内部道徳に頼る組織運営から、この社会は部族社会の性格を持つと考えられるが、一方で、多くの団体の集団としての都市の性格から、その運営にあたっては普遍性と抽象性も要求される。

都市はその発展に従い、未知の人々との匿名的な出会いの場としての性格を強め、言葉によって他者の支持を得る「外部道徳的人間」が内部道徳主体の都会人に取って代わるようになる。更に時代が進むと、「都市住民たる市民の特性が市民社会の担い手たる市民性へと展開する課程」へと発展する。この過程を、鈴木は以下のように述べる。

自由の制度化、産業化の進展、全面的な都市化、階層構造の解放化、集団・組織の噴出と多元開花が進む課程であって、都

市型共同体が一国社会全体のスケールに拡散していったのとともに、共同体内部道徳の主体性は個人単位に解体していく
… 共同体道徳は個人化し、外部道徳に対抗していた内部道徳は規制力を弱めて拡散し、その後、国家の法体系を骨組みとする公的社會統制作用に引き継がれていく [鈴木 1996]

電子的コミュニケーションは既に全地球規模に拡散している。電子的コミュニケーションを律する法体系は今だ十分整備されているとはい難く、内部道徳も、徐々に力を失いつつあるとの印象はあるものの、いまだ有効に機能していると考えられるが、今後徐々に法による支配に移行していく可能性が高い。

鈴木氏は「都市化の三つの側面」として以下をあげている。これらの変化は、電子的コミュニケーション上の議論の中にも見い出される。

個人主義化 共同的・集団的生活から、個人的・選択的生活へ

世俗化 聖なる宗教的価値が失われ、便宜と計算、合理的配慮の優先へ

伝統的文化体系の解体 単一の文化的統合から多様な文化の並立へ

都市は、封建制の中の近代という、例外的な社会形態として誕生した。組織や国境の壁を越えるインターネットを介した電子的コミュニケーション上の社会も、现代社会の枠から外れた社会との感もある。将来の社会が、インターネットの原理である、自律分散型の社会関係に移行するか否か、極めて興味深い。

5.6 フラットな社会関係

「情報技術の真の力は古いプロセスを改善することにあるのではなく、古いルールを壊し、新しい仕事のやり方を創造すること…」[Hammer 1993]、「機械情報の発達と普及は、近代組織のヒエラルキーを危機に陥れる性格を備えている。」[堺屋 1993]等々、電子的コミュニケーションをはじめとする情報技術が組織のあり方に変化を及ぼすと、多くの経営学者が指摘している。伝統的な社会関係がピラミッド型のヒエラルキー社会関係であったのに対し、電子的コミュニケーションの作り出す社会関係は、フラットな、ネットワーク型の社会関係であるといわれている。

電子的コミュニケーション上の個性は、社会的な地位や肉体的な魅力は意味を持たず、専門能力の発揮や、ボランティアとしてのコミュニティ

への貢献努力を評価されることによって他者に認められ、パーソナリティが確立される。評価基準は個々のメンバーの機能の実用的な側面である。これは、生まれや社会的な地位などで活動の機会が制約される閉じた社会より、個人の側からは個性の發揮する機会が多く、組織の側からは高い効率的が期待できる。組織は専門能力を持つ人材を広く求めることができ、個人は自分に合った目標を広い範囲から求めることができる。このようなネットワーク社会がうまく機能すれば、個人には自己を確立し、個性の評価を得る大きな機会を与えると同時に、社会に新たな活力を呼び戻すことができよう。

近未来に登場すると考えられているフラットな組織の典型として、コンピュータ犯罪を取り締まる組織“FCIC”を紹介した文を以下に示す。そこに現れているものは、専門性と使命感に支えられた自律的な有機的人間関係であり、フラットな社会が匿名的な社会関係に直接結びつくものではないことを示している。

シークレットサービス、FBI、国税局、労働省、連邦検察局の各支局、州警察、空軍、軍の情報部といったFCICの常連は、しばしば自前でアメリカのあちこちで会議を開く。FCICには資金援助はない、会費を請求することもない。ボスもいなければ本部もない…人々はやってきてはまた去る——正式に「去った」人間が、あいかわらずうろついていることもある。誰もこの「委員会」の「会員資格」が実際にどういうものか、はっきりと説明できない。…ここ数年、経済評論家や経営理論家は、情報革命の波が、全てトップダウンで集中管理される固定的なピラミッド型の官僚制を破壊するだろうと考えている。高度に訓練された「被雇用者」は、より強い自律性をもって自身の判断と動機によってある場所からある場所へ、ある仕事からある仕事へと非常なスピードと柔軟性をもって動いていくだろう。「特別委員会」がルールとなり、組織の枠を超えて自発的に人々が集まり、直接問題に取り組んで、コンピュータによって支援された専門知識をそれに適用し、やがて元の場所に戻っていく。

多かれ少なかれ、連邦のコンピュータ捜査のあちこちで、こうしたことは起こっている。電話会社だけが異彩を放つ例外だが、それは100歳以上の老人なのだ。事実上、この本で主要な役割を果すすべての組織が、FCICとまったく同じように機能している。シカゴ対策本部、アリゾナ恐喝対策班、破滅

の軍団、『ブラック』のグループ、エレクトロニック・プロンティア・ファウンデーション——どれもが、「結束の固いチーム」あるいは「ユーザーズグループ」のように見え、またそのように活動している。それらはどれも、必要に応じて自主的に発生した電子的特別委員会だ。[Sterling 1992]

このような組織形態は、伝統的な組織形態の中では、「マトリックス型組織」と呼ばれる形態に近い。マトリックス型組織において、メンバーはヒエラルキー型の組織の一員として組織に属する一方で、必要に応じて組織横断的に集められた人々で構成されたプロジェクトチームの一員として専門性を生かして仕事をする。電子的コミュニケーション上のコミュニティー(特にインターネット上のコミュニティー)が伝統的なプロジェクトチームと異なる点は、組織の枠を超えて協力関係を形成すること、旧来のマトリックス型組織がトップダウンでプロジェクトチームを形成するのに対し電子的コミュニケーション上のコミュニティーはそれぞれの参加者が主体的に参加するボトムアップ型であること、関与に対する責任の程度が電子的コミュニケーション上のコミュニティーでは低い等の特徴がある。

フラットな社会といえども、個々の業務を遂行する組織と、それらを支える資源を保持する組織、あるいは、それぞれの活動相互の関係を調整する機能といった、重層的な社会関係が現れる。フラットな社会関係が伝統的なヒエラルキー的社会関係と本質的に異なる部分は、これらの重層的社会関係が、あくまでも補助的な機能にとどまり、組織の枠を超えた自然発生的な組織が業務遂行の中心部分であること、またこのような組織が人々の興味の中心である点である。電子的コミュニケーション、特にインターネットは、フラットな社会の典型といえる。資源は大学、企業、あるいはサービス会社等の伝統的な組織によって提供され、参加者もさまざまな伝統的な組織に所属している。その一方で、電子的コミュニケーションを利用し、あるいはその上に形成されたさまざまなコミュニティーで、それぞれの役割を果たしている。ネットニュースというコミュニケーションの場自体も、ある種の重層的社会を構成している。接続やコミュニケーションの場の規約といった全体的な議論の場が存在し、その結果に従って全てのニュースグループの運用がなされている。これらは個々のコミュニケーションの場をカバーする、上位の組織とみなすことができよう。しかし、この上位組織の個々のコミュニケーションの場に対する影響は、それぞれのコミュニケーションの場と、他のコミュニケーションの場、あるいは伝統的な社会組織との間の調整機能にとどま

り、個々のコミュニケーションの場でなされる議論そのものに影響を与えることは稀である。参加者の主な興味の対象はそれぞれの場でなされる議論そのものであり、全体的な運用に関する議論は、多くのニュースグループで補助的な役割にとどまっている。

フラットな社会関係は、それぞれの技能・専門に応じた人々がそれぞれの役割を担うことを前提に集まった組織であり、それぞれの価値を互いに認め合うことが基本にある。このような関係は匿名的な関係とはいえない。このことは、フラットな組織が抽象社会と相反することを意味するわけではない。抽象社会といえども、必ずしも匿名的人間関係の場であるとはいはず、その中に暖かい人間関係が形成される可能性を残している。

5.7まとめ

この研究の端緒は、私がネットニュースと言うコミュニケーションの場に参加して、その生氣溢れる情報交換に心を引かれる一方で、混乱と対立に傷つく人々を目のあたりにし、心を痛めたことに始まる。電子的コミュニケーションは、閉塞した現代社会の壁を破り、政治の分野でも、経済、産業の分野でも新しい可能性を提供するものとして大きな期待を集め一方で、電子的コミュニケーションに関わるさまざまな事件も発生し、社会に混乱を与える要因ともなっている。

電子的コミュニケーションの普及が社会にいかなる影響を与えるのか、また、それが引き起こす問題を未然に防ぎ、社会的に有益な技術とするためには如何なる施策が適切なのか、という問いは、現代の我々にとっても重要な問題と思われるにも関わらず、明確な解は提示されていない。

この問題は、人間社会の本質に関わる問題であり、その解は、情報技術の研究のみによっては得られないと予想された。一方、これまでになされている社会学的アプローチは、電子的コミュニケーションの混乱した姿を描写し、可能性について論じているが、電子的コミュニケーション上に生じた社会の外部からの観察に頼る傾向が高く、その社会内部に身をおいてなされるフィールドワークが充分ではないように思われた。

そこで、本研究では、ネットニュースという電子的コミュニケーションに常にアクセスしつつ、そこで生じている現象、問題を念頭に、社会に対してなされたさまざまな研究成果にあたり、社会学的知見の応用の道を探った。

コミュニケーションの場で議論されている内容は、メッセージを読む

ことによって把握することができる。読解によって、その場に普遍性指向とコミュニティ指向という、興味深い対立が存在することはほぼ理解されたが、この結論は研究者の主観が介在する余地が多い。そこで、主成分分析という統計的手法により、主成分スコアとして個々のメッセージに客観的な特性指標を与え、議論の過程における特性指標の変動を自己相関係数およびパワースペクトルにより分析する新しい手法を開発し、解析に応用した。その結果、記事の特性指標が振動するという現象が、多くの議論において確認され、何らかの対立が発生していることを示唆した。また、主成分の意味と、特徴的な主成分スコアを持つ記事の読解によって、対立点を判定し、これと読解によって得られた対立とを比較することにより、より明瞭に対立点を把握することができた。

ネットニュース上で生じている現象は、伝統的な社会においても古くから議論された問題である。しかし、ネットニュース上で生じている問題は、伝統的な社会で生じている問題とは種々の点で異なることも同時に見出された。

第一の相違点は、学術ネットに始まる、伝統的な集団主義的参加者と、新たに参入した個人主義的利用者の間の文化対立である。ここで、一般的な社会関係においては、集団主義は村落的コミュニティに対応し、個人主義は都市型人間関係に対応するが、ネットニュース上で生じている対立は、集団主義的な古くからの参加者が普遍性を重んじ抽象的・匿名的コミュニケーションを重視するのに対し、個人主義的傾向の強い新しい参加者が暖かみのある人間関係を求めているという差がある。このことは、村落的コミュニティと普遍性の追求が両立し得ることを示唆する。

第二の相違点は、匿名的人間関係がもたらす都市型病理現象(アイデンティティの危機)と、これを防止するコミュニティ再生の可能性である。これに関しては、話題に応じてコミュニケーションの場を振り分けることで、電子的コミュニケーションの場であっても、普遍性が要求されない話題であれば暖かみのある仲間社会を指向する場が形成可能であることが示されると同時に、普遍性が要求される場においても、専門知識等の評価により、個性をもった、非匿名的人間関係が可能であり、コミュニティが成立し得ることが示された。

第三の相違点は、電子的コミュニケーションというメディアの持つ特殊な機能である。瞬時に伝達されるメディアと、長期にわたって蓄積されるメディアとは、感性と知性のいずれに強く働きかけるかという点で両極端にあり、部族的社会関係を前者がつくり出す一方で後者が破壊するという違いがあるが、電子的コミュニケーション手段はその双方の性質を同時に備えるという特徴を持つ。これは、電子的コミュニケーション

ンを介した社会に混乱を招く原因となると同時に、双方の社会関係をカバーする伝達手段となり得ることを意味する。

電子的コミュニケーションに対しては、従来の社会規範を逸脱する傾向が高いともいわれているが、現実のネットニュースの場では、法律を遵守しようとする傾向が高く、また、インターネットへの接続が既存の社会制度に含まれる組織を介してなされることから、法を逸脱する利用には一定の歯止めがかかっている。

自律分散というインターネットの社会モデルは、民主主義や市場経済など、今日成功した社会形態にも共通してみられる特徴である。コミュニケーション手段という、社会を成り立たせる根源の部分にこのような社会関係を促進する技術が浸透することは、よりフラットな社会関係が実現するとともに、より多くの人々に機会を与える開かれた社会と、アイデンティティの確立を手助けする、暖かい人間関係に支えられたコミュニティの双方を実現する可能性を内包していると思われる。それをいかにして実現するかが、我々に与えられた今後の課題であろう。

Bibliography

- [赤坂 1995] 赤坂憲雄: 異人論序説 (1985).
- [Bolz 1993] Bolz, N.: *Am Ende Der Gutenberg-Galaxis: Die neuen Kommunikationsverhältnisse* (1993). (識名章喜, 足達典子訳: グーテンベルグ銀河系の終焉: 新しいコミュニケーションのすがた法政大学出版局 (1999)).
- [Deerwester 1990] Deerwester, S. et al.: Indexing by Latent Semantic Analysis, *Journal of the American Society for Information Science*, Vol. 41, No. 6, pp. 391–407 (1990).
- [浜野 11997] 浜野保樹: 極端に短いインターネットの歴史, 昌文社 (1997).
- [Hammer 1993] Hammer, M. and Champy, J.: *Reengineering the Corporation: A Manifesto for Business Revolution* (1993). (野中郁次郎監訳: リエンジニアリング革命: 企業を根本から変える業務革新日本経済新聞社 (1993)).
- [判例 1997] 東京地裁: 平成 9 年 5 月 26 日判決, 判例時報, No. 1610, pp. 22–44 (1997).
- [Hauben 1997] Hauben, M. and Hauben, R.: *Netizens: On the History and Impact of Usenet and the Internet*, IEEE Computer Society (1997). (井上博樹, 小林統訳: ネティ즌: インターネット, ユースネットの歴史と社会的インパクト, 中央公論社 (1997)).
- [日野 1977] 日野幹雄: スペクトル解析, 朝倉書店 (1977).
- [Horton 1987] Horton, M. and Adams, R.: Standard for Interchange of Usenet Messages (1987). Network Working Group/Request for Comments: 1036.

- [金子 1996] 金子郁容: 『つながり』の大研究: 電子ネットワーカーたちの阪神淡路大震災, 日本放送出版協会 (1996).
- [井佐原 1997] 井佐原均, 小作浩美, 内元清貴: 討論型ニュースグループを対象とする知的ニュースリーダの開発, 情報処理学会研究報告, Vol. NL-119-3, pp. 13–18 (1997).
- [Johnston 1999] Johnston, K. and Johal, P.: Internet as a “virtual cultural region”, *Internet Research: Electric Networking Applications and Policy*, Vol. 9, No. 3, pp. 178–186 (1999).
- [神谷 1997] 神谷国弘, 中道實編: 都市の共同性の社会学 — コミュニティ形成の主体的要件, ナカニシヤ出版 (1997).
- [桂木 1997] 桂木隆夫: 岩波講座 現代の法 10 情報と法 (序章), 岩波書店 (1997).
- [川上 1993] 川上善郎, 川浦康至, 池田謙一, 古川良治: 電子ネットワーキングの社会心理 — コンピュータ・コミュニケーションへのパスポート, 誠信書房 (1993).
- [木村 1997] 木村忠正著: 第二世代インターネットの情報戦略, NTT 出版 (1997).
- [Krippendorff 1980] Krippendorff, K.: *Content Analysis: An Introduction to Its Methodology*, Sage Publications, Beverly Hills, CA (1980). (三上俊治, 椎野信雄, 橋本良明訳: メッセージ分析の技法: 「内容分析」への招待, 効草書房 (1989)).
- [公文 1996] 公文俊平: ネティ즌の時代: The Age of Netizens, NTT 出版 (1996).
- [国沢 1966] 国沢清典: 確率統計演習 2: 統計, 倍風館 (1966).
- [Lederberg 1978] Lederberg, J.: Digital Communications and the Conduct of Science: The New Literacy, *Proceedings of the IEEE*, Vol. 66, No. 11, pp. 1314–1319 (1978).
- [Levinson 1999] Levinson, P.: *digital mcluhan: a guide to the information millennium* (1999). (服部桂訳: デジタル・マクルーハン: 情報の千年紀へ NTT 出版 (2000)).

- [Licklider 1978] Licklider, J. C. R. and Vezza, A.: Applications of Information Networks, *Proceedings of the IEEE*, Vol. 66, No. 11, pp. 1330–1346 (1978).
- [Linton 1936] Linton, R.: *The Study of Man*, New York & London (1936).
- [Lyotard 1986] Lyotard, J.-F.: *La condition postmoderne* (1979). (小林康夫訳：ポスト・モダンの条件水声社 (1986)).
- [Maffesoli 1988] Maffesoli, M.: *Le Temps des tribus — Le déclin de l'individualisme dans les sociétés de masse*, Librairie des Méridiens-Klincksieck et Cie (1988). (古田幸男訳：小集団の時代：大衆社会における個人主義の衰退，法政大学出版局 (1997)).
- [松原 1978] 松原治郎：コミュニティの社会学 (1978).
- [松井 1995] 松井啓之：阪神・淡路大震災におけるインターネットの利用，平成7年度科学研究費補助金：総合研究(A)研究成果報告書「情報ネットワーク技術の動向とその社会的インパクト」pp.23-32 (1995).
- [松井 1997] 松井孝雄：. (<http://www.nuis.ac.jp/pda-j/>).
- [McLuhan 1964] McLuhan, M.: *Understannding Media — The Extensions of Man*, McGraw-Hill Company, New York (1964). (栗原裕，河本伸聖訳：メディア論—人間の拡張の諸相，みすず書房 (1987)).
- [Meed 1934] Meed, G. H.: *Self, and Society, from the standpoint of a social behaviorist*, The University of Chicago Press (1934). (河村望訳：「デューイ=ミード著作集6」精神・自我・社会，人間の科学社 (1995)).
- [村井 1994] 村井純，吉村 伸編：インターネット参加の手引き，共立出版 (1994).
- [村越 1998a] 村越広享，落水浩一郎：電子メールを利用した協同作業における会話のコーヒーレンスと話題の完結度の関係，コンピュータソフトウェア，Vol. 15, No. 3, pp. 50–53 (1998).
- [村越 1998b] 村越広享，島津明，落水浩一郎：電子メールを利用したコミュニケーションにおける討議の流れの自動抽出について，情報処理学会研究報告，Vol. FI-51-2, pp. 9–16 (1998).

- [野田 1987] 野田正彰: コンピュータ新人類の研究, 文藝春秋 (1987).
- [小川 1999] 小川知也, 落谷亮, 西野文人: 文書クラスタの判別のための特徴表現付与 (1999).
- [Parker 1976] Parker, D. B.: *Crime by Computer* (1976). (羽田三朗訳: コンピュータ犯罪秀潤社 (1977)).
- [Paxson 1995] Paxson, V. and Floyd, S.: Wide Area Traffic: The Failure of Poisson Modeling, *IEEE/ACM Trans. on Networking*, Vol. 3, No. 3, pp. 226–244 (1995).
- [Popper 1950] Popper, K.: *The Open Society and its Enemies*, Princeton University Press (1950). (内田詔夫, 小河原誠訳: 開かれた世界とその敵, 未来社 (1980)).
- [Riesman 1950] Riesman, D.: *The Lonely Crowd*, Yale University Press, New Haven (1961). (加藤秀俊訳: 孤独な群衆, みすず書房 (1994)).
- [Rose 1995] Rose, L.: *NetLaw: Your Rights in the Online World*, McGraw Hill Inc. (1995). (Fems 訳: ネットワークの罠: 知らないうちに犯罪者!?, アスキー (1996)).
- [斎藤 1998] 斎藤典明, 水澤純一, 山本平一, 山口英: 話題の自動抽出による電子メールの情報組織化手法, 情報処理学会論文誌, Vol. 39, No. 10, pp. 2907–2913 (1998).
- [堺屋 1993] 堀屋太一: 組織の盛衰: 何が企業の命運を決めるのか, PHP研究所 (1993).
- [Schutz 1970] Schutz, A.: *On Phenomenology and Social Relations*, The University of Chicago Press (1970). (森川眞木雄, 浜日出夫訳: 現象学的社会学, 紀伊國屋書店 (1980)).
- [瀬尾 1996] 瀬尾雄三: ネットニュースにおける投稿行動の解, 修士論文, 筑波大学経営システム科学専攻 (1996).
- [Sproull 1992] Sproull, L. and Kiesler, S.: *Connections: new ways of working in the networked organization*, The MIT Press (1992). (加藤丈夫訳: コネクションズ: 電子ネットワークで変わる社会, アスキー出版局 (1993)).

- [Sterling 1992] Sterling, B.: *The Hacker Crackdown: Law and Disorder on The Electronic Frontier* (1992). (今岡清訳：ハッカーを追え、アスキー出版局 (1993)).
- [鈴木 1996] 鈴木広: 都市化の研究, 恒星社厚生閣 (1996).
- [豊泉 1997] 豊泉周治: アイデンティティの社会理論 — 転形期日本の若者たち, 青木書店 (1997).
- [Tylor 1871] Tylor, E. B.: *Primitive Culture* (1871).
- [内元 1997] 内元清貴, 小作浩美, 井佐原均: 対話型ネットニュースグループにおける話題転換記事の推定 (1997).
- [内元 1998] 内元清貴, 小作浩美, 井佐原均: キーワードによるネットニュース記事群の構造化 (1998).
- [Vaitkus 1991] Vaitkus, S.: *How is Society Possible?: Intersubjectivity and the Fiduciary Attitude as Problems of the Social Group in Mead, Gurwitsch and Schutz*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht/Boston/London (1991). (西原和久, 工藤浩, 菅原謙, 矢田部圭介訳：「間主観性」の社会学, 新泉社 (1996)).
- [Virilio 1996] Virilio, P.: *Cybermonde, la politique du pire entretiens avec Philippe Petit*, éditions Textuel (1996). (本間邦雄訳：電能世界：明日への対話, 産業図書 (1998)).
- [White House 1993] TheWhiteHouse: *The National Information Infrastructure: Agenda for Action*, NITA NII Office, Washington, D.C. (1993). (<ftp://nita.doc.gov/pub/niiagend.exe>).
- [Wirth 1938] Wiirth, L.: Urbanism as a Way of Life, *The American Journal of Sociology*, Vol. 44, No. 1, pp. 1–24 (1938). (高橋勇悦訳, 「生活様式としてのアーバニズム」, 鈴木広編「都市化の社会学」(1965)).
- [山下 1997] 山下清美, 三浦麻子, 杉本卓, 野村一夫: インターネットにおけるコミュニケーションは, そこに集まる人々にとってどのような意味を持つのか, 情報処理学会研究報告, Vol. 97, No. 63, pp. 49–54 (1997).

ネットニュース投稿記事

- [1] akio@lab.kdd.co.jp: (Message-ID: akio-2907981312270001@ishikawa.rd.lab.kdd.co.%-jp).
- [2] akio@lab.kdd.co.jp: (Message-ID: akio-3007981818240001@ishikawa.rd.lab.kdd.co.jp).
- [3] akio@lab.kdd.co.jp: (Message-ID: akio-2307981220410001@ishikawa.rd.lab.kdd.co.jp).
- [4] akio@lab.kdd.co.jp: (Message-ID: akio-2907981312030001@ishikawa.rd.lab.kdd.co.jp).
- [5] akio@lab.kdd.co.jp: (Message-ID: akio-2307981220410001@ishikawa.rd.lab.kdd.co.% -jp).
- [6] fuchs@asahikawa.med.ac.jp: (Message-ID: 66q7ud\$32d\$1@file-sv.asahikawa-med.ac.jp).
- [7] fuchs@asahikawa.med.ac.jp: (Message-ID: 66lnkj\$1lg\$1@file-sv.asahikawa-med.ac.jp).
- [8] ktokita@fsinet.or.jp: (Message-ID: ktokita\$5ca119970517140356@news.fsinet.or.jp).
- [9] ktokita@ibis.fsinet.or.jp: (Message-ID: ktokita\$5ca11997051401341-1@news.fsinet.or.jp).
- [10] ktokita@ibis.fsinet.or.jp: (Message-ID: 5m2jf8\$ui\$1@horyse.yfsinet.or.jp).
- [11] ktokita@ibis.fsinet.or.jp: (Message-ID: 5kv2tc\$ka6\$1@horse.fsinet.or.jp).
- [12] ktokita@ibis.fsinet.or.jp: (Message-ID: 970507015548.M0102715@ibis.st.rim.or.jp.st.rim.or.jp).
- [13] ktokita@ibis.fsinet.or.jp: (Message-ID: ktokita\$5ca1199705160141-39@news.fsinet.or.jp).

- [14] kusune@sfc.keio.ac.jp: (Message-ID: KUSUNE.98Jul26225642@ccz00.sfc.keio.ac.jp).
- [15] kusune@sfc.keio.ac.jp: (Message-ID: KUSUNE.98Jul26225642@ccz00.sfc.keio.ac.jp).
- [16] nao1@urban.ne.jp: (Message-ID: 63puo9\$5lq@nntp.urban.or.jp).
- [17] ohyoshi@kumagaya.or.jp: (Message-ID: E9xJ2n.5Mt@kumagaya.or.jp).
- [18] ohyoshi@kumagaya.or.jp: (Message-ID: E9vBJF.83u@kumagaya.or.jp).
- [19] ohyoshi@kumagaya.or.jp: (Message-ID: 63svfg\$jjr\$1@news01.kumagaya.or.jp).
- [20] ohyoshi@kumagaya.or.jp: (Message-ID: 64foj1\$j8q\$1@news01.kumagaya.or.jp).
- [21] s95046@info.yuge.ac.jp: (Message-ID: yt1yatmv7m1.fsf@saint.info.-yuge.ac.jp).
- [22] s95046@info.yuge.ac.jp: (Message-ID: yt1pvex422y.fsf@saint.info.-yuge.ac.jp).
- [23] s95046@info.yuge.ac.jp: (Message-ID: yt1pvex422y.fsf@saint.info.-yuge.ac.jp).
- [24] s95046@info.yuge.ac.jp: (Message-ID: yt1yatmv7m1.fsf@saint.info.-yuge.ac.jp).
- [25] saka@digcode2.fuee.fukui.u.ac.jp: (Message-ID: 6pc2l3\$r6k\$3@icpc-05.icpc.fukui-u.ac.jp).
- [26] saka@digcode2.fuee.fukui.u.ac.jp: (Message-ID: 6osfvu\$g70\$1@icpc-05.icpc.fukui-u.ac.jp).
- [27] saka@digcode2.fuee.fukui.u.ac.jp: (Message-ID: 6p1jq\$7ov\$1@icpc-05.icpc.fukui-u.ac.jp).
- [28] saka@probab1.fuee.fukui.u.ac.jp: (Message-ID: SAKA.98Jul271043-42@probab1.fuee.fukui-u.ac.jp).

- [29] saka@probab1.fuee.fukui u.ac.jp: (Message-ID: SAKA.98Jul31131-645@probab1.fuee.fukui-u.ac.jp).
- [30] saka@probab1.fuee.fukui u.ac.jp: (Message-ID: SAKA.98Jul30163-210@probab1.fuee.fukui-u.ac.jp).
- [31] saka@probab1.fuee.fukui u.ac.jp: (Message-ID: SAKA.98Jul27093-900@probab1.fuee.fukui-u.ac.jp).
- [32] saka@probab1.fuee.fukui u.ac.jp: (Message-ID: SAKA.98Jul271822-52@probab1.fuee.fukui-u.ac.jp).
- [33] sasano@lsi.sel.sony.com: (Message-ID: SASANO.97May19160322@-swan.lsi.sel.sony.com).
- [34] shirai@pon.nintendo.co.jp: (1997). (Message-ID: 65iqhu\$0t\$1@yellow.nintendo.co.jp).
- [35] shirai@pon.nintendo.co.jp: (1997). (Message-ID: 65jg35\$7o9\$1@yellow.nintendo.co.jp).
- [36] shirai@pon.nintendo.co.jp: (1997). (Message-ID: 65h33p\$85o\$1@yellow.nintendo.co.jp).
- [37] shirai@pon.nintendo.co.jp: (1997). (Message-ID: 65dgkr\$o29\$1@yellow.nintendo.co.jp).
- [38] sk1@orange.ocn.ne.jp: (Message-ID: 66mrb9\$79n\$1@nn-os00-1.ocn.ad.jp).
- [39] takk1105@vir.bekkoame.ne.jp: (Message-ID: takk1105-2707981438-470001@yhma1089.bekkoame.or.jp).
- [40] toyosima@magical2.egg.or.jp: (Message-ID: 64s2ss\$gno\$1@newseg-00.tokyonet.ad.jp).
- [41] y_katoh@mars.dtinet.or.jp: (Message-ID: 5l057t\$n1m\$1@news.dti-net.or.jp).